

## 7 両頭金具の構造と奈良県における出土例

三好 栄太郎

### はじめに

熊本県上天草市に所在するカミノハナ古墳群から両頭金具が出土していることが、今回の再報告に伴う整理作業により判明した。この両頭金具は、研究の初期においては用途不明の金具とされてきたものであるが、近年では弓に装着されたと考えてまず間違いないことがわかっている。この両頭金具の研究は、実物が遺存しにくい弓本体の研究や当時の武装具様式の研究において大きな役割を果たすであろう。しかし、両頭金具の研究はそれほど進んでいるとはいえないのが現状である。これは、両頭金具の報告や図化が十分に行われていないということも要因の一つであると考えられる。実際、報告書や展示などで両頭金具が器種不明の鉄器として扱われているのを目にすることは多い。両頭金具という遺物に対する認識が、まだそれほど広く浸透してないように感じるのである。そこで本稿では、カミノハナ古墳群のものを中心として両頭金具を取り上げていきたい。

### 1 研究史

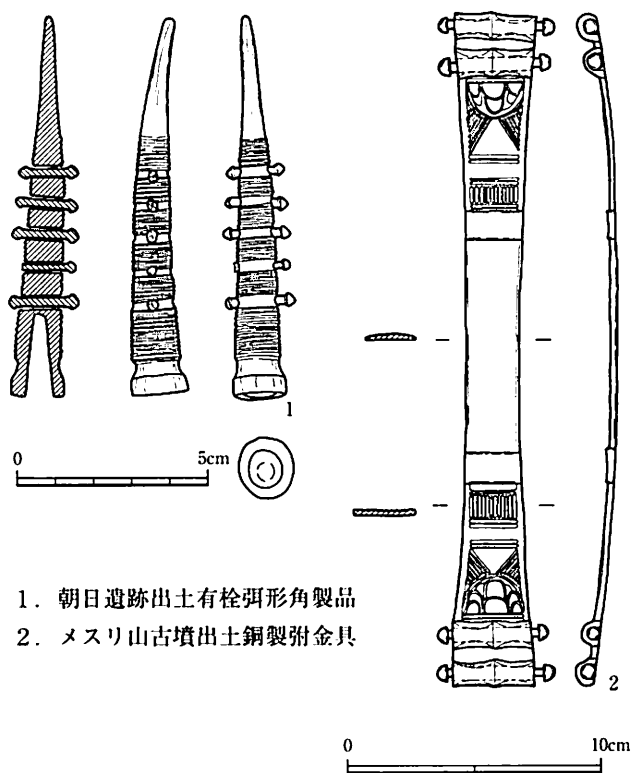
ここで研究史を振り返り、両頭金具研究の現状を整理しておく。

両頭金具の基本的な構造については、研究の比較的早い段階から明らかにされている（栗本編1975）。しかし、用途不明の金具として各報告書で触れられることしかなく、両頭金具についてまとまった考察は長らく行われていなかった。そのような中、初めて両頭金具についてまとまった考察を行ったのが市毛勲である。市毛はこの金具に「両頭座金付留金具」という名称を与え、出土状況を考慮しながら用途について考察を行った。また、両頭金具の構造についても先学を踏まえながら解説している（市毛1978）。

市毛の考察で両頭金具の用途について結論は出なかったが、それからほどなくして、田中新史によりこの金具が弓の装飾に用いられたものであるという説が提示された。田中は装飾された弓についての論考の中で両頭金具を取り上げ、弓本体や弓形埴輪の観察、出土状況などからこれが弓に装着されたものであり、装飾に用いられたものであるとした。また、両頭金具の年代観や分布、そして両頭金具が出土する古墳の被葬者の性格についても言及している（田中1979）。

弓に装着されたことについては、その後宮崎県西諸県郡野尻町大萩36号地下式横穴墓（茂山1980）や福島県いわき市小申田北第18号横穴墓（櫻村編1988, 図4-22）などから、実際に弓に装着された状態の両頭金具が発見されるにおよび、疑う余地はなくなった。しかし、装飾のために用いられたということについては、近年になって別の見方が提出されている。比佐陽一郎は両頭金具がそれほど目立つものではないとし、その構造とあわせて視覚効果よりも音響効果を重視したものであるとした。また、この考察の中で比佐は福岡県内の両頭金具を集成し、その構造や年代観、共伴遺物についても言及している（比佐1996・2002）。

橋本達也は有機質甲冑や盾、鞞、胡籥、弓といった武具の中で両頭金具を取り上げ、比佐の音響効果を狙ったものであるという考えを支持している。また、両頭金具が主に後期の古墳から出土するこ



1. 朝日遺跡出土有槍弭形角製品  
2. メスリ山古墳出土銅製附金具

図1 両頭金具との関連が考えられる遺物

されるものばかりではないことが原因の1つであろう。そのために、細部の形態による分類が難しく、また両頭金具として報告されないものがあるために集成作業などが行いにくいということが考えられるのである。そこで本稿では、これまでも度々論じられてきたことであるが両頭金具の観察の一助になることを願い、その構造について新たに気付いた点も加えながら検討していくことを1つ目の目的とする。また、これまでの集成作業は全国的なものとして田中による集成（田中1979）が、地域的なものとして比佐による福岡県内の集成（比佐1996・2002）、井鍋による静岡県内の集成（井鍋2003）などがある。田中の集成により両頭金具の全国的な出土傾向は明らかとなったが、早い時期での集成であったためにその後の出土例増加がかなりあると思われる、地域ごとの出土古墳は再び検討しなおす必要があるだろう。そこで、現在の奈良県域に焦点を当てて集成作業を行い、出土傾向について若干の考察を行うことを2つ目の目的とする。

## 2 各部名称

ここで両頭金具の部分名称について説明を行うが、それとともに両頭金具が装着される弓についても部分名称の説明を簡単に行っておきたい（図2）。

弓には弦を張らなければならないが、弦を固定する弓の両端部分が弭である。弦を弭に装着するには、引っ掛けたり結びつけたりすることで行う。弓の上側のものを末弭、下側のものを本弭と呼ぶ。なお、この弭には弓本体を削り出して形作るものと、金属や鹿角から別に作ったものを弓に被せるものがある。

弓の手で握る部分を附という。栃木県下都賀郡大平町七廻り鏡塚古墳出土の弓の中には、細い紐状のものが巻かれたものがあり、この部分が附であろうと推定されている（大和久編1974）。また、鉄製の弓が出土しているメスリ山古墳からは、形態や出土状況から鉄弓の附に装着されたと考えられる

とから、前・中期と後期では古墳に持ち込まれる弓の性格に違いがある可能性を指摘した（橋本2003）。

また井鍋君之も静岡県内の出土例を集成し、両頭金具の性格について論じるとともに、両頭金具を装着した弓は祭祀的側面が強いとの見解を示した（井鍋2003）。

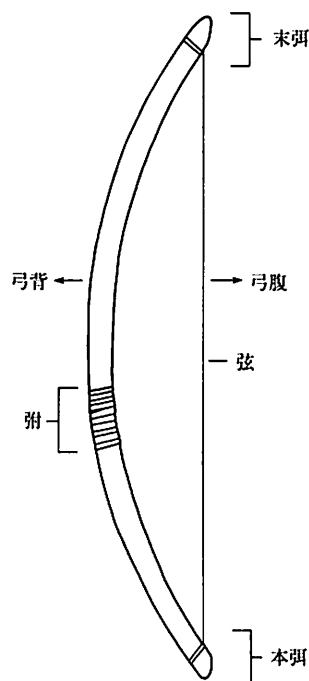
両頭金具の系譜については、弥生時代の骨角器である有槍弭形角製品との関係が言われており（藤井2003）、橋本もこれを首肯するとともに、奈良県桜井市メスリ山古墳（伊達編1977）出土の附金具にみられる鋳飾りとの関連も示唆している（橋本2003）（図1）。

両頭金具についての研究を概観したが、これまでの研究では構造と用途に主に焦点が当てられ、成果が挙げられてきた。一方、全国各地の様相や編年などはまだまだ不明な点が多い。これは、両頭金具の報告が、十分な観察の元にな

金具が見つかった（伊達編1977）。

次に両頭金具である。この金具自身について、これまで様々な名称が付けられたことがあったが、弓に装着されたことが判明した後は報告書や論考において概ね両頭金具という名称が定着している。このことから本稿でも両頭金具と呼んでいる。

両頭金具は筒の中に芯棒を差し込んだ2重構造となっている。この外側の筒状の金具のことを皮金具、芯棒のことを芯金具と呼ぶ。この金具については皮金、芯金という名称も用いられているが、日本刀で用いられる皮金（皮鉄）、心金（心鉄）という語と字並びや読み方が同じになることから、ここでは皮金具、芯金具としたい。皮金具の両端は弓に取り付けるために折り返されており、この部分を折り返し部とする。また、皮金具から抜けないように芯金具の両端はかしめられている。そこで、芯金具の棒状の部分を軸部、その両端のかしめられた部分を頭部と呼ぶ。



### 3 両頭金具の構造・装着例

#### (1) 両頭金具の構造

構造についてはこれまでの研究で多くの部分が明らかになっている。ここで述べる内容もそれらを大きく塗り替えるものではないが、カミノハナ古墳群出土資料を中心にいくつか気付いた点を加えながら、両頭金具の構造を詳しくみていく。

上述したように、両頭金具は皮金具の内側に芯金具を挿入した2重構造となっている。両頭金具を弓に装着する際には、まず弓本体にあけた孔に皮金具を挿入して両端を外側に折り返すことで固定する。次にその皮金具に、片方だけをかしめた芯金具を挿し込み、その後芯金具のもう一方をかしめるという方法が推定されている（市毛1978, 図3）。現状でこれ以外の装着方法は考えにくく、その後の研究でもこの方法での装着が受け入れられている。

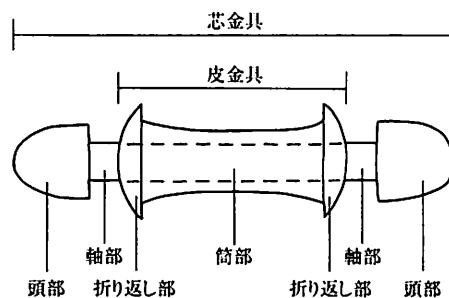


図2 弓と両頭金具の各部名称

皮金具は非常に薄い鉄板を円筒状に丸めたもので、静岡県駿東郡長泉町原分古墳（井鍋編2008, 図

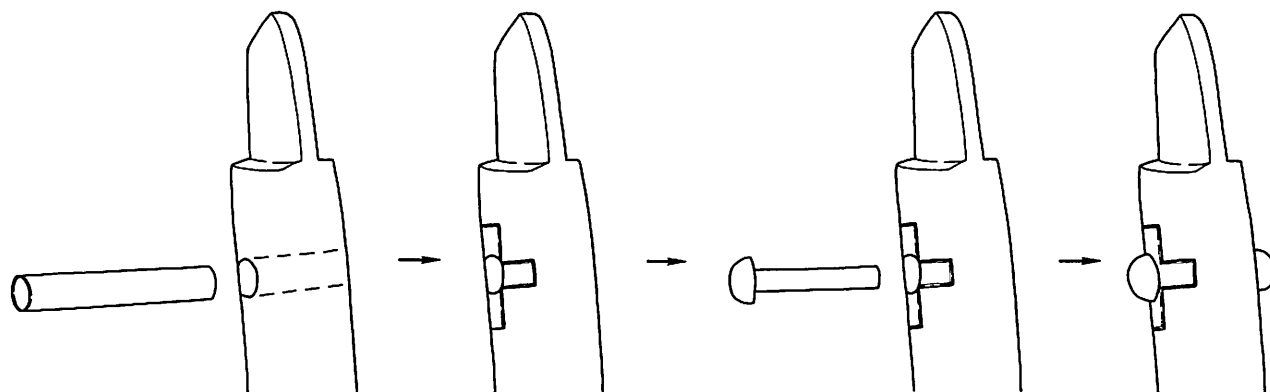


図3 両頭金具の装着方法

4-3) や香川県高松市茶臼山古墳（松本・西澤・杉山2008, 図4-5）では鉄板を丸めた際のつなぎ目が観察されている。

皮金具の折り返し部については、残存状態が良くないため、カミノハナ古墳群出土例では十分に観察できない。しかし、状態が良好な他の古墳の出土品をみると、折り返しやすいように鉄板に切り込みを入れている様子が多く観察されており、結果的に折り返し部は花卉状を呈する。この切り込みは4方向に入れられたものが多いようであるが、5方向以上に切り込みを入れたものもみられる。切り込みだけでなく、折り返し部の先端に細工を施すことで、より装飾性を高めたものもある。ただし、折り返し部の残りがそれほどよくないとはいえカミノハナ古墳群出土のものには確実に切り込みであると判断できる痕跡は認められない。また、福岡県福岡市三苦永浦1号墳出土の両頭金具は花卉状に切り開いていなかったと判断されている（比佐1996, 図4-6）。円筒状のものを折り返すためには切り込みを入れることが合理的であると思われるが、そのような造作が施されていないものがある可能性も想定しておく必要があるだろう。このように、銹化などにより判断が難しいことしばしばではあるが、折り返し部の形状には様々なバリエーションがあり、両頭金具を分類する際の大きな指標になると考えられる。

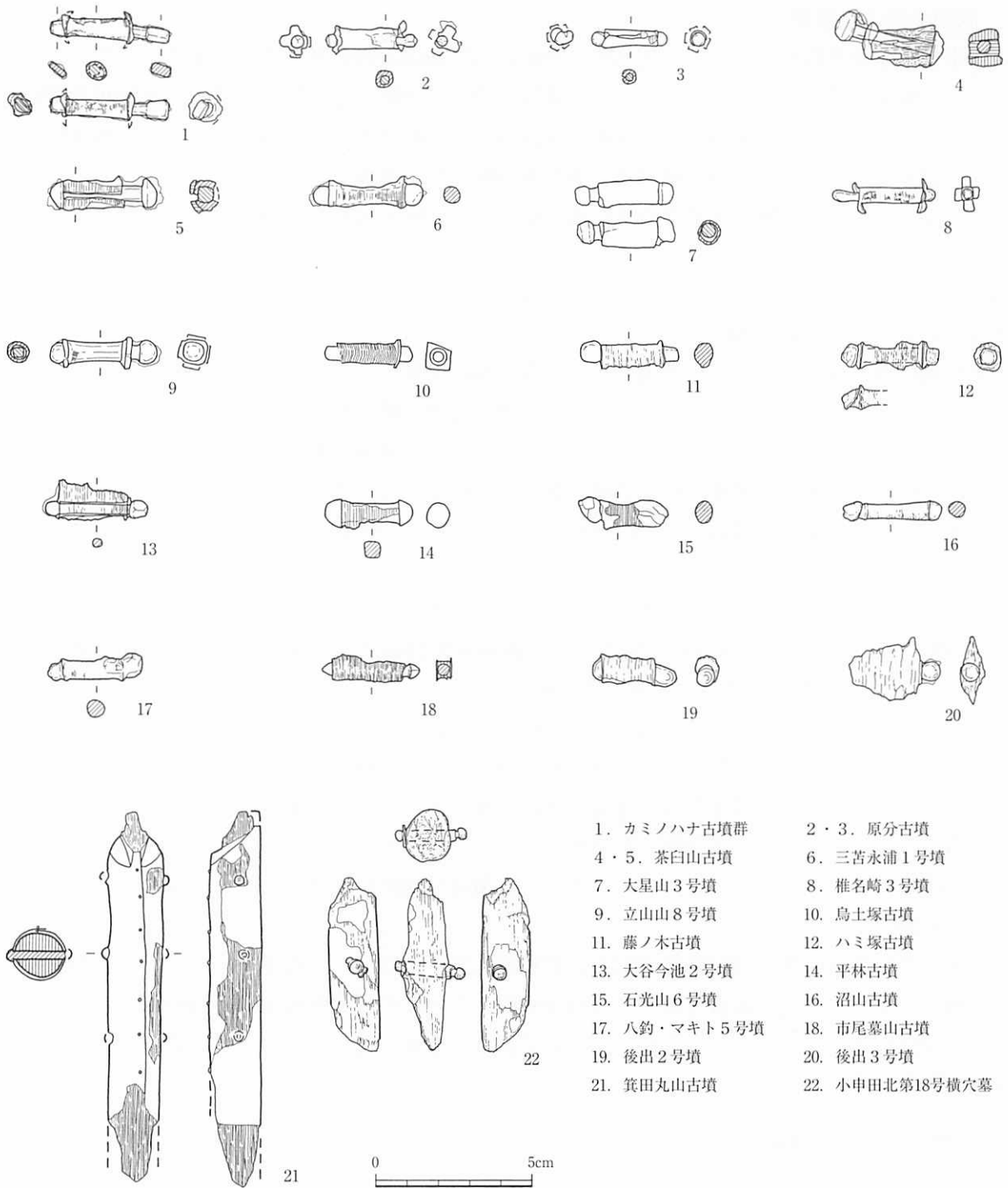
直接弓に取り付けられるのはこの皮金具であるので、皮金具の表面には木質が付着している。基本的に両頭金具の軸に対して直角方向の木質が付くが、その場合木質が直線的に観察できる面が弓腹側、弓背側となる。両頭金具を末弭側、本弭側、つまり天地方向からみた場合、木質は直線的には観察できない。またそのとき、折り返し部は弓本体の横断面にあわせた弧を描く（図4-1）。これらのことを材料に両頭金具の天地と側面の区別を付けることができる。また、実測図によって折り返し部の間隔から弓の径を復元する場合には、天地方向からみたものと側面からみたものでは間隔が異なることになる。当然、天地方向からみた折り返し部の間隔が弓の径を反映することになる。

カミノハナ古墳群出土の両頭金具を観察すると、左右で皮金具の径が異なるものがある。カミノハナ古墳群以外のものでもこの様子が認められるものがあるが、これが製作時に意図せずしてゆがんだだけであるのか、それとも製作技法の上で必然的にもたらされたものであるのか判断できない。また、皮金具の径が左右で異なるものも認められる。ここでは、そのようなものがあるという指摘だけに留めておきたい。

芯金具の頭部の形態については、カミノハナ古墳群にみられる扁平な方形のものや球形、半球形のもの、または多角形を呈するものなど様々なバリエーションが認められる。また、カミノハナ古墳群の両頭金具では、芯金具の頭部に左右で大きさの差があることがわかる。小さいほうの頭部は弓に取り付けられたのち最後にかしめられたものであることを示すのであろう。この他、片側の頭部が不整形の例があり、これもまた最後にかしめられたものであると考えられている（檜村編1988）。

カミノハナ古墳群の両頭金具で皮金具と芯金具両方の残りが比較的よいものをみると、皮金具に対して芯金具が長くなっているのがわかる。比佐陽一郎は、このあそびにより皮金具の中を芯金具が左右に動き、音響効果が得られると考えた（比佐1996・2002）。しかし、他の古墳の出土例をみると必ずしもそういったものばかりではなく、このあそびがほとんどないものも多くみられる。

両頭金具の材質をみるとほとんどが鉄であるが、それ以外のものもある。原分古墳では鉄製のものの他に芯金具が銅製のもの、芯金具が鉄製で頭部を銀で被覆しているものの3種類が確認されている（井鍋編2008）。小申田北第18号横穴墓からは皮金具、芯金具ともに金銅製の両頭金具が出土している（檜村編1988）。また、神奈川県三浦市江奈2号横穴墓では皮金具も芯金具も銅製のものが



- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| 1. カミノハナ古墳群   | 2・3. 原分古墳       |
| 4・5. 茶白山古墳    | 6. 三苦永浦1号墳      |
| 7. 大星山3号墳     | 8. 椎名崎3号墳       |
| 9. 立山山8号墳     | 10. 烏土塚古墳       |
| 11. 藤ノ木古墳     | 12. ハミ塚古墳       |
| 13. 大谷今池2号墳   | 14. 平林古墳        |
| 15. 石光山6号墳    | 16. 沼山古墳        |
| 17. 八鈎・マキト5号墳 | 18. 市尾墓山古墳      |
| 19. 後出2号墳     | 20. 後出3号墳       |
| 21. 箕田丸山古墳    | 22. 小申田北第18号横穴墓 |

図4 両頭金具の諸例

(横須賀考古学会編1976)、静岡県田方郡函南町柏谷D19K横穴墓では皮金具が金銅製で芯金具が鉄製のものが(平野・佐藤編1975)報告されている。

研究史で両頭金具の効果について、視覚効果を狙ったものであるという説と音響効果が主な目的であったという説があると述べた。ここで私見を述べるならば、両頭金具には折り返し部の形態や材質などにおいて明らかに視覚を意識したのがあること、また芯金具に対する皮金具のあそびが必ずしも十分でないことから、やはり視覚的な効果を最も重視していたのではないかと考えている。ただし、これは必ずしも弓を使用した際に音響的な効果もあったということを否定しない。

## （2）両頭金具の装着例

これまで両頭金具の構造について述べてきたが、次に両頭金具がどのように装着されていたのかをみていく。両頭金具が実際に弓に装着された状態で出土した例としては、上述した小申田北第18号横穴墓、大萩36号地下式横穴墓以外に、福岡県京都郡みやこ町箕田丸山古墳（下原・山口編2004, 図4-21）、熊本県山鹿市湯の口129号横穴墓（中村編1990）などがある。

大萩36号地下式横穴墓例では長さ6cm、幅2cmの弓片に両頭金具が2cm間隔で3本取り付けられている（茂山1980）。

湯の口129号横穴墓例では長さ12.9cm、幅1.9cmの弓片に2.2~2.5cmの間隔で4点の両頭金具が取り付けられている（中村編1990）。

小申田北第18号横穴墓では弓片が遺存していない両頭金具が1点出土している他に、弓片が遺存している両頭金具が4点、それに弭金具とその縁に取り付ける縁金具が末弭と本弭に対応するように1対ずつ出土している。報告者は出土状況から、1張の弓の末弭側に約5cm間隔で4点の両頭金具が、本弭側に1点の両頭金具が装着された状態を想定している。この両頭金具は上述したように金銅製で、弭金具と縁金具も金銅製であると報告されている。また、弓自身には黒漆が塗られている（榎村編1988）。

箕田丸山古墳からは銀の薄板で全体を巻いている弓の破片がみつかり、その弭に近い部分に2.4cm間隔で3点の両頭金具が残っている。この両頭金具は鉄製で、銀箔が被せられているとされている。弓の径は3.6cm程度である（下原・山口編2004）。

なお、小申田北第18号横穴墓で両頭金具が末弭、本弭両側に装着されている様子が想定されていると述べたが、必ずしも両頭金具が弓の両側に取り付けられるわけではない。例えば奈良県大和高田市大谷今池2号墳では、未盗掘であった木棺直葬の主体部から4点の両頭金具が1ヶ所に集中して検出され、弓の一端、おそらくは末弭側に装着されていたものと想定されている。原位置を保っていた両頭金具の間隔は3.5~4cm、6cmである。また、両頭金具検出時には弓の木質が遺存していたとされる（宮原編2003）。

この他、両頭金具の装着状況の参考になる資料として高松市茶臼山古墳例がある。ここでは、両頭金具の軸に直交した方向の木質が皮金具に付着するとともに平行方向の木質も観察されており、弓に穿けた孔が皮金具の径に対して大きかったために別材で充填したものとされている（松本・西澤・杉山2008, 図4-4）。

## 4 奈良県の出土例

これまでの両頭金具研究では、田中新史の検討により北部九州や東海、関東地方に多く分布していることが明らかにされ（田中1979）、その後、福岡県や静岡県において集成作業が行われた（比佐1996・2002, 井鍋2003）。しかし、古墳時代の中心地である奈良県における様相はほとんど明らかでない。田中の集成でも1例が報告されているだけである。そこで今回、奈良県に焦点を当てて両頭金具の集成を試みた。

表1に挙げたとおり、奈良県内の出土例として12基の古墳を集めることができた（図5, 表1）。遺漏があることも考えられるが、この数字は108基の古墳から出土しているとされる福岡県の数字（比佐2002）や、90基の古墳から出土しているとされる静岡県（井鍋2003）と比べて非常に少ないということができよう。



図5 奈良県内における両頭金具出土古墳の分布（アミは標高100m以上を示す）

時期についてみると、奈良県内の出土例として現在確認できる最も古いものは、TK23～TK47型式並行期に比定される宇陀市後出2号墳、3号墳（西藤・吉村・佐々木編2003）のものである。この他の例はすべて後期<sup>①</sup>に属する。須恵器をみると、奈良県内で両頭金具とともに出土するのはTK43型式のものが多く、追葬や攪乱があるため両頭金具の所属時期を決めがたいものもあるが、現在のところ奈良県内の例で最も新しいと判断できるのは天理市ハミ塚古墳から出土したものである。須恵器はTK43～TK209型式のものが出土している（土橋編2003）。このように、奈良県内において両頭金具は後期に盛期を迎える。また、東日本を中心に全国的な検討を行った田中新史は7世紀前後に両頭金具を装着した弓の副葬が最も多し（田中1979）、福岡県でも両頭金具の出土例は後期に集中する（比佐1996）。このように、盛期を迎えるのは後期以降というのが全国的な傾向のようである。しかし一方で、前期の古墳からも両頭金具の出土は知られる。前期の例としては前期後半の高松市茶臼山古墳、長野県長野市大星山3号墳（土屋・青木・町田編1996）から出土したものが、また中期初頭の岡山県岡山市金蔵山古墳から両頭金具と思われる金具が出土している（西谷・鎌木

表1 奈良県内における両頭金具出土古墳一覧表

	古墳名	遺構名	遺物
1	烏土塚古墳		須恵器 土師器 銅鏡 玉類 耳環 馬具 金銀装大刀 鉄刀 矛 石突 鉄鏃 弓 盛矢具 刀子 鉈 鋸 埴輪
2	藤ノ木古墳		須恵器 土師器 銅鏡 玉類 金属製装身具 金銅製円形・花卉形製品 馬具 金属装大刀 鉄刀 金属装剣 鉄鏃 盛矢具 挂甲 ミニチュア農工具 刀子 針 釘 金銅製飾金具 器種不明鉄器 木製品 織維 埴輪
3	ハミ塚古墳		須恵器 土師器 耳環 馬具 鉄製振環頭 刀装具 鉄刀 鉄鏃 刀子 鉄滓 金銅製筒状金具
4	大谷今池2号墳	2号木棺	須恵器 土師器 玉類 馬具 銀装振環頭 鉄刀 鉄鏃 刀子 鏝 針 器種不 明鉄器 埴輪
5	平林古墳		須恵器 土師器 銅鏡 玉類 耳環 馬具 鉄刀 矛 鉄鏃 刀子 鉄斧 鉈 鏝 釘 鏡 器種不明鉄器
6	石光山6号墳	北土壙	須恵器 土師器 刀子 曲刃鎌 鏝 鉈
7	沼山古墳		須恵器 土師器 玉類 耳環 馬具 鉄鏃 釘 鏡 鉈 器種不明鉄器
8	八釣・マキト5号墳		須恵器 土師器 馬具 鉄鏃 器種不明鉄器
9	市尾墓山古墳		須恵器 土師器 玉類 馬具 刀装具 鉄刀 鉄鏃 胡録金具 刀子 器種不 明鉄器 埴輪
10	市尾宮塚古墳		須恵器 玉類 耳環 金銀製歩揺 金銅製鈴 馬具 銀装振環頭大刀 金銅製環 頭柄頭 刀装具 鉄刀 鉄鏃 小札
11	後出2号墳		須恵器 土師器 玉類 鉄刀 鉄剣 鉄槍 矛 鉄鏃 横矧板鋸留短甲 刀子 曲刃鎌 鉄斧 鏝 砥石
12	後出3号墳	第2主体部	土師器 銅鏡 飾 鉄刀 蛇行剣 鉄槍 鉄鏃 三角板横矧板併用鋸留短甲 刀 子 器種不明鉄器

1959) のも古い例である。研究史で述べたように両頭金具は弥生時代の骨角製品との関係が指摘されており、また橋本が指摘するようにメスリ山古墳出土の附金具に類似した構造が認められることから(橋本2003)、両頭金具の出現についてはさらに遡る可能性もあるだろう。

次に奈良県内における両頭金具の分布をみると、奈良盆地の南部に多いことがわかる。これは、両頭金具が盛行する後期において、奈良盆地に分布する古墳は南部に偏在している(前園1979)ことに起因すると考えられる。

奈良県内の両頭金具が出土する古墳をみると、確認できた12基の古墳のうち、半数の6基が前方後円墳や比較的大型の円墳、方墳である。これらの古墳の主体部はすべて横穴式石室に家形石棺を有するものであり、生駒郡平群町烏土塚古墳(伊達・岡編1972)のように地域最大規模の前方後円墳や生駒郡斑鳩町藤ノ木古墳(勝部・松田・千賀・林編1990, 前園・関川・松田編1993)のように極めて豊富な遺物が出土したものも含まれる。盗掘などもあり、藤ノ木古墳とまではいかなくとも、これらの古墳の副葬品は馬具を含む金銅製品や装飾付大刀、鏡など質、量ともに豊富である。また、両頭金具を出土する前方後円墳の規模は50mを超えるものが多いが、大和の後期前方後円墳は規模50mを境に1つの画期があり、50m以下のものではそれ以上のものに比べて数が急激に増えるという指摘(前園1979)も被葬者について考える重要な事実となるだろう。

一方、両頭金具はそれほど大きくない古墳からも出土している。しかし、これらの古墳は墳丘規模や墳形にはそれほど目立つ点がないものの、豊富な副葬品をもつことが多い。大谷今池2号墳では振環頭大刀が共伴しており、また同一墳丘にある別の主体部からは金銅製冠が出土している(宮原編2003)。橿原市沼山古墳からは金銅装のものを多く含んだ馬具を出土しており、盗掘により本来のセットは保っていないが、調査者は馬具の一式がほぼ揃っていたのではないかと想定している(伊藤編1985)。後出古墳群は中期の古墳群であるが、そのうちの2号墳と3号墳から両頭金具が出土して



須恵器型式	主体部	墳形	規模	所在地	文献
TK43	横穴式石室 家形石棺 組合せ式石棺	前方後円	60.5m	奈良県生駒郡平群町	伊達・岡編1972
TK43	横穴式石室 家形石棺	円	48m	奈良県生駒郡斑鳩町	勝部・松田・千賀・林編1990
TK43～TK209	横穴式石室 家形石棺	方	46.7×44.1m	奈良県天理市	土橋編2003
TK43	木棺直葬	円	24m	奈良県大和高田市	宮原編2003
TK43・TK217	横穴式石室 木棺 家形石棺？	前方後円	62m	奈良県葛城市	坂編1994
TK10	木棺直葬	円	15m	奈良県御所市	白石・河上・亀田・千賀編1976
TK43	横穴式石室 木棺	円	18m	奈良県橿原市	伊藤編1985
TK43	横穴式石室	円	22m	奈良県高市郡明日香村	清岡編2001
TK10	横穴式石室 家形石棺	前方後円	66m	奈良県高市郡高取町	河上編1984
TK10	横穴式石室 家形石棺 木棺	前方後円	44m	奈良県高市郡高取町	高取町教育委員会編1998
TK47	木棺直葬	円	15m	奈良県宇陀郡大宇陀町	西藤・吉村・佐々木編2003
TK23？	木棺直葬	円	13m	奈良県宇陀郡大宇陀町	西藤・吉村・佐々木編2003

いる。後出古墳群は1次調査と2次調査で16基の古墳が調査されているが、この2号墳、3号墳をはじめとする4基の古墳で甲冑を含む多量の鉄製武器・武具が副葬されており、他の古墳から出土する副葬品は貧弱であった（西藤・吉村・佐々木編2003）。つまり、同一古墳群の中でも質、量ともに副葬品が豊かな古墳から両頭金具が出土しているのである。高市郡明日香村八鈎・東山古墳群は尾根上に築造された古墳群で、7基の古墳が調査されている。5号墳から両頭金具とともに、須恵器の耳杯、金銅装のものを多く含んだ馬具ほぼ一式など豊富な遺物が出土している。盗掘が激しいため正確な比較はできないが、ここでも調査された古墳のうち5号墳を含む2基の古墳で豊かな副葬品がみられ、他の古墳はこれに比べて遺物が顕著でない（清岡編2001）。このように、前方後円形などの墳形や比較的大きな墳丘をもっていなくても、副葬品の内容においては決して貧弱とはいえない古墳から両頭金具が出土しているのである。

以上のように奈良県では、前方後円形や比較的大きな墳丘を有し、副葬品においても豊富な内容をもつ古墳や、墳形や墳丘には際立った点がないものの副葬品については豊富な内容をもつ古墳において両頭金具の出土が多い。墳形や墳丘、副葬品の内容が被葬者の階層性などを示していると考えられるならば、比較的階層的に高い人物から相当の有力者までが両頭金具を装着した弓を副葬していたといえるだろう。

ここで先学を参考に奈良県以外の地域の様相と比べてみると、両頭金具が出土する古墳の被葬者については、田中新史は後世の郷単位の最有力者層であるとし（田中1979）、井鍋誉之は小首長層から有力家長層に至る階層であるとしており（井鍋2003）、両者とも比較的高い階層を想定している。その一方で出土傾向に違いも認められ、先述したように奈良県の出土例は福岡県や静岡県に比べて非常に少ないものとなっている。また、出土古墳は、墳丘を有するものについては福岡県と静岡県ともに円墳が圧倒的であり、それも群集墳など同一古墳群内での複数古墳副葬が多いとされている（比佐

1996・2002, 井鍋2003)。それに加え横穴墓からの出土も多いようである。東日本、北部九州ともに前方後円墳からの出土もみられるが、やはり全体としてこの傾向は揺るがないようである。これに対し、奈良県内では前方後円墳から出土する割合が高い。古墳全体をみたときに前方後円墳に比べて円墳の数の方がはるかに多いことから、円墳に多く副葬されるという傾向は、両頭金具が出土する古墳自身の数と関係しているのかもしれないが、これらの意味については今後の課題としたい。

## おわりに

ここまでの検討で、先学を踏まえながら両頭金具の構造を把握し、また奈良県内における集成作業をもとに若干の考察を行った。ここでの考察は小さな遺物に対する細かな構造の観察を中心としたものであるが、これが今後の両頭金具研究への1つのステップとなれば幸いである。

## 注

1) ここでいう後期とは、陶器編年MT15型式並行期以降とする。また、中期の開始については前方後円墳集成編年4期後半以降、帯金式甲冑出現以降とする（橋本2005）。

## 引用・参考文献

- 市毛 勲 1978「古墳出土の鉄製留金形小品について－その名称と用途をめぐって－」『古代学研究』第87号 古代学研究会：pp. 20-24
- 伊藤勇輔編 1985『沼山古墳・益田池堤』奈良県文化財調査報告書第48集 奈良県立橿原考古学研究所
- 井鍋眷之 2003「静岡県内の飾り弓について－両頭金具をもつ被葬者の性格－」『研究紀要』第10号 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所：pp. 251-271
- 井鍋眷之編 2008『原分古墳』調査報告編 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第184集 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大和久震平編 1974『七廻り鏡塚古墳』帝国地方行政学会
- 檜村友延編 1988『小申田横穴群－古代墓制の研究－』いわき市埋蔵文化財調査報告第20冊 福島県いわき市・財団法人いわき市教育文化事業団
- 勝部明生・松田真一・千賀 久・林日佐子編 1990『斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 河上邦彦編 1984『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第5冊 高取町教育委員会
- 清岡廣子編 2001『明日香村遺跡調査概報』平成11年度 明日香村教育委員会
- 栗本佳弘編 1975『千葉南部ニュータウン1－椎名崎古墳群（第1次）－』日本住宅公団首都圏宅地開発本部・（財）千葉県都市公社
- 佐田 茂・伊崎俊秋編 1983『立山山古墳群』八女市文化財調査報告書第10集 八女市教育委員会
- 茂山 護 1980「Ⅲ 大萩地下式横穴36号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集 宮崎県教育委員会：pp. 29-60
- 下原幸裕・山口裕平編 2004「Ⅱ. 福岡県京都郡における二古墳の調査－箕田丸山古墳及び庄屋塚古墳－」『長崎県・埴華園遺跡の研究 福岡県京都郡における二古墳の調査－箕田丸山古墳及び庄屋塚古墳－ 佐賀県・東二郎古墳群の研究－補遺篇－』福岡大学考古学研究室研究調査報告第3冊 福岡大学人文学部考古学研究室：pp. 75-148
- 白石太郎・河上邦彦・亀田 博・千賀 久編 1976『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊 奈良県教育委員会
- 高取町教育委員会編 1998『国指定史跡市尾宮塚古墳』現地説明会資料 高取町教育委員会

- 伊達宗泰編 1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊 奈良県教育委員会
- 伊達宗泰・岡幸二郎編 1972『烏土塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊 奈良県教育委員会
- 田中新史 1979「古墳出土の飾り弓－銀飾りの弓の出現と展開－」『伊知波良』第1号 伊知波良刊行会：pp. 8-30
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 土屋 積・青木一男・町田勝則編 1996『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』7 (財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書20 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 土橋理子編 2003『ハミ塚古墳』奈良県文化財調査報告書第102集 奈良県立橿原考古学研究所
- 中村幸史郎編 1990『湯の口横穴群』(Ⅲ) 山鹿市立博物館調査報告書第10集 山鹿市教育委員会
- 西谷眞治・鎌木義昌 1959『金藏山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊 倉敷考古館
- 西藤清秀・吉村和昭・佐々木好直編 2003『後出古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第61冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 橋本達也 2003「有機質製甲冑・盾・靱・胡籬・弓」『考古資料大観』第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品 小学館：pp. 194-199
- 橋本達也 2005「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論－松林山古墳と津堂城山古墳から－」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室：pp. 539-556
- 坂 靖編 1994『平林古墳』當麻町埋蔵文化財調査報告第3集 當麻町教育委員会
- 比佐陽一郎 1996「2、三苦永浦1号墳出土の弓金具」『三苦永浦遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第476集 福岡市教育委員会：pp. 232-242
- 比佐陽一郎 2002「弓金具の再検討」『考古学ジャーナル』No. 496 ニュー・サイエンス社, pp. 24-27
- 平野吾郎・佐藤達男編 1975『伊豆柏谷百穴』静岡県教育委員会・函南町教育委員会
- 広瀬和雄 1991「第3章 前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社：pp. 24-26
- 藤井 整 2003「弥生時代の飾り弓－いわゆる有栓弭形角製品について－」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-1 家根祥多さん追悼論集 立命館大学考古学論集刊行会：pp. 549-562
- 前園実知雄 1979「大和における後期前方後円墳の規模と分布について」『橿原考古学研究所論集』第4 吉川弘文館：pp. 157-178
- 前園実知雄・関川尚功・松田真一編 1993『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所
- 松本和彦・西澤昌平・杉山和徳 2008「高松市茶臼山古墳出土鉄製品の基礎的研究」『調査研究報告』第4号 香川県歴史博物館：pp. 239-269
- 宮腰健司編 1992『朝日遺跡』Ⅲ 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第32集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 宮原晋一編 2003『大谷今池1号墳・2号墳』奈良県文化財調査報告書第101集 奈良県立橿原考古学研究所
- 横須賀考古学会編 1976『三浦市江奈横穴群』横須賀考古学会

#### 挿図出典

- 図1-1：宮腰編1992より再トレース  
2：伊達編1977より再トレース
- 図2：筆者作成
- 図3：筆者作成
- 図4-1：本報告より再トレース  
2・3：井鍋編2008より再トレース  
4・5：松本・西澤・杉山2008より再トレース  
6：比佐1996より再トレース  
7：土屋・青木・町田編1996より再トレース

- 8：栗本編1975より再トレース
- 9：佐田・伊崎編1983より再トレース
- 10：伊達・岡編1972より再トレース
- 11：勝部・松田・千賀・林編1990より再トレース
- 12：土橋編2003より再トレース
- 13：宮原編2003より再トレース
- 14：坂編1994より再トレース
- 15：白石・河上・亀田・千賀編1976より再トレース
- 16：伊藤編1985より再トレース
- 17：清岡編2001より再トレース
- 18：河上編1984より再トレース
- 19・20：西藤・吉村・佐々木編2003より再トレース
- 21：下原・山口編2004より再トレース
- 22：樫村編1988より再トレース

図5：筆者作成